

ウィトゲンシュタイン解釈における超越論的自然主義批判―「訓練」と「自然誌」の検討を通して

千葉大学博士前期課程二年 槇野沙央理

ウィトゲンシュタインは『哲学探究』198節の対話的記述において、「規則の表現は私の行動とどういった関わりがあるのか」という問いに対し、「私はこの記号に一定の仕方では反応するように訓練されているから、こんどもそのように反応する」と答える。この回答は、規則遵守に因果的説明を与えたのではなく、「人はある恒常的な慣用、ある慣習のあるときに限って道しるべに従う」ことを「暗示」しているのである。

マリー・マッギンは“Wittgenstein and Naturalism” (2010) において、ウィトゲンシュタインのこうした姿勢を「自然主義的傾向」と呼んだ。マッギンによれば、ウィトゲンシュタインは、訓練や実践が背景となって規則遵守が意味をもつようになると考えていた、という意味で自然主義的である。マッギンの考察は、規則遵守の可能的条件を訓練の考察によって与えようとするものであり、これを超越論的自然主義と呼ぶことができる。

本発表の目的は、超越論的自然主義がウィトゲンシュタイン解釈として不適切であることを証明することにある。そのために、ウィトゲンシュタインの訓練に関する記述と、「自然誌」概念の検討を行う。

第一に、ウィトゲンシュタインの訓練に関する記述の検討では、『心理学の哲学』2巻300番前半の節に着目する。ウィトゲンシュタインにとって訓練の考察が、規則遵守の背景を与えるためではなく、概念の本質的な特性（「内的性質」）を明らかにするためであることを示す。ウィトゲンシュタインが、『哲学的文法』1巻43節において「前史」や因果的説明に関心外としたのも、同じ理由によるものと見なせるだろう。

第二に、ウィトゲンシュタインの「自然誌」概念の検討では、『数学の基礎』に登場する「自然誌」や「人類学」に着目する。発表者の考えでは、ウィトゲンシュタインが「自然誌」という概念によって示そうとしたものは、人間の営みとして言語操作の記述を眺めた際、そこに規範性が内在していることを見てとることである。このことから規則遵守が成立していることを示し、ウィトゲンシュタインはその可能的条件としての訓練を考察していたわけではないことを明らかにする。『哲学探究』219節で「規則に盲目的に従っている」と言われるのも、こうした事情のもとに読まれるべきであろう。

発表者は、こうした検討によって超越論的自然主義を退けたのち、ウィトゲンシュタインの自然主義的傾向を、「共助関係」という独自の概念によって特徴付ける。